



長野市立博物館
NAGANO CITY MUSEUM



博物館だより

Nagano City Museum

第100号

長野市立博物館のこれまで、そしてこれから
—博物館だより 100 号を記念して—



表紙（上）の写真は、竣工直後の長野市立博物館です。さあ、博物館の前に立って35年の時を経た現在の博物館と比べてみてください。明らかな違いは屋根に見られます。屋根は厚さ1.2mmのガルテン鋼という耐候性鋼板が使用されており、現在は長い年月をかけて安定さびへと移行している途上だそうです。さびが出始めのころは「再塗装しないと穴があいてしまうのでは」というご心配を多数いただきましたが、その心配はいらないようです。ご安心ください。

さて、博物館だよりが100号を迎えました。第1号の発行は昭和57年8月のことで、34年前になりますが、それは開館から1年ほど経った時期でした。当時は紙の規格はB版が主流だったため、博物館だよりもB5版で印刷され、A4版に変更されたのは平成11年7月発行の第47号からです。また、カラー印刷も高価であったため長い間モノクロ仕様でしたが、平成20年11月発行の第72号になってようやくカラー印刷になりました。

このように、過去の博物館だよりを見ていくと、時代の変化も垣間見ることができます。

ここでは、これまでの長野市立博物館を振り返り、また「これから」についても少し考えてみることにします。

1 建設まで

昭和 46 年度に作成された長野市総合基本計画に博物館建設が盛り込まれ、昭和 48 年に設置された博物館建設調査委員会によって基本構想作成が始まりました。昭和 54 年 4 月、同委員会の答申を受けて博物館建設事務室が新設され、建設へと本格的に動き出します。特筆すべきは、建物の設計業者の選定において従来行われてきた入札方式から、8 者による正規ルールに従った指名競技設計方式（コンペ）を採用した点です。審査の結果榊宮本忠長設計事務所に決定しました。建設地は昭和 53 年に開設された八幡原史跡公園（川中島古戦場）で、「四方の山々と点在する民家と調和する建物」というコンセプトで設計されました。

昭和 55 年 4 月 28 日建築工事に着手し、昭和 56 年 5 月 31 日に竣工しました。なお、この建物は昭和 56 年に日本建築学会賞、平成 10 年に公共建築百選、平成 22 年に JIA（社団法人日本建築家協会）25 年賞を受賞しています。

2 開館

昭和 56 年 4 月 1 日、職員 14 人体制で博物館組織が発足し、私もその内の 1 人でした。同年 9 月 23 日の開館に向けて予想をはるかに上回る忙しい毎日が始まりました。

博物館の基本理念は、

- (1) 市民の文化創造の拠点施設とする。
- (2) 先人の遺産である貴重な文化財、郷土の歴史、民俗、自然等に関する資料を収集、保管、展示し、活用する施設とする。
- (3) 人文科学、自然科学の調査、研究、学習のセンターとする。
- (4) 美術、工芸、学術の市民活動センターとする。
- (5) 博物館法に基づく施設とする。

このように、当館は人文科学及び自然科学

の両分野を扱う総合博物館と位置づけられました。文部科学省の社会教育調査によると、昭和 56 年の時点で県内には登録博物館が 20、博物館相当施設が 7 しかなく、延べ床面積 7257.7㎡の大規模な長野市立博物館は間違いなく地域から大きな注目と期待が寄せられていました。因みに、昭和 61 年ごろ始まったバブル期から博物館施設の建設も増えていき、昭和 62 年は、県内の登録博物館が 36、博物館相当施設 6、博物館類似施設は 145 になっていました（昭和 56 年における博物館類似施設のデータは不明）。そして、平成 27 年には登録博物館が 71、博物館相当施設 8、博物館類似施設が 276 と、昭和 62 年に比して約 2 倍になっています。

常設展示は基本的には大きく変わっていませんが、開館時にあったものの、今は存在しない展示があります。その代表は、地震体験室で、過去三つの大きな地震動を地震計データに基づいて二次元（前後・左右）で忠実に再現され、起震台に乗って体感できるものでした。連日毎回大変な人気で、稼動過多も原因してたびたびの故障により、ついには廃止せざるを得なくなりました。平成 4 年 1 月、地震体験室は地震計と地震情報のコーナーに変わりました。

3 特別展示・企画展示

常設展示の補完展示として特別展、企画展があります。学芸員の調査研究の発表の場でもあり、テーマに沿って、モノをとおしてどのようにその趣旨を見てもらえるかが学芸員の腕の見せ所でもあります。

開館記念事業として開催した最初の特別展は「機織」でした。伝統・文化を伝えるというのも博物館の役割であり、長野市周辺で古くから盛んだった養蚕と製糸業、そういった技術を記録するとともに保存し、それに伴う道具類の変遷を知ってもらうことが展示の趣旨でした。特別展示室では、実際に技術を持つ地元の方々が糸取り、真綿がけ、糸つむぎ、染色、機織などの実演を行いました。

以後、年間 3 回程の特別展、企画展を行ってきました。当館の特別展示室の特徴は、なんと言っても広いということです。これは平

面だけでなく天井の高さも含めてで、面積は573.2㎡、天井までの高さは最高9.9mもあります。大きいことは利点もあれば難点もあります。難点としては、温湿度管理が難しいこと、展示物への照明計画が難しいこと、そして、大きな空間で展示することの困難さにありました。そんな中、当館が行ったのは手作りの展示です。大きな展示室ゆえ、立体的な造作物によってより迫力のある展示が可能になり、また、通常の展示室では展示できない大きなもの、たとえば幟や大絵図、ゾウや恐竜の実物大骨格標本など、大展示室ならではの展示を行うことができました。連日、のこぎりと金槌を手に特別展示室で展示作業、造作を行っていた日々を思い出します。

蛇足ですが、私が初めて担当した企画展は昭和63年の「時と太陽の物語」でした。時という概念と太陽との深いかかわりを展示しましたが、そのとき、前庭に水平式日時計を設置しました。これは、土地の位置（緯度経度）に合わせて科学的計算のもと作成された文字盤と、夜、北極星の方向を観測しながら正確に設置位置を決めることによって、±1分という精度で時刻を読むことができる日時計になりました。松代産の自然石（安山岩）の上に設置されており、晴れた日に一度、日時計で時刻を知ってみたいだけだと思います。（博物館だより第11号）

年度	企画展・特別展
昭和56年度	機織
昭和57年度	長野の祭り はにわの世界 職人さん
昭和58年度	シナノから科野国へ 街道と旅 ワラと生活
昭和59年度	仕事着 ―変遷と地域性― 縄文人のくらし
昭和60年度	善光寺信仰 台所と仕器の世界 漁とくらし
昭和61年度	鏡の文化 のりもの今昔 農家とくらし
昭和62年度	稲を伝えた人々―その生活と墓制 森の文化 子どもの生活誌
昭和63年度	節供人形とおもちゃ 時と太陽の物語 ―日時計から原子時計まで― 信玄と謙信 ―川中島の合戦とその周辺― 生活用具 ―新収蔵資料より―
平成元年度	ゆれる大地 ―地震・観測・災害― 信濃野の馬 郷土の工芸と作家たち
平成2年度	地図にみる村と町 蚕糸業にみる近代の長野盆地
平成3年度	千曲川 長野盆地の文化財（前期） ―美と歴史の世界― 長野盆地の文化財（後期） ―祈りの諸態―
平成4年度	星との対話 水・稲・まつり
平成5年度	宇宙への挑戦 ―日本の宇宙開発― 浄土信仰の美 ―浄土へのあこがれ― まつる・ふさぐ・もやす
平成6年度	信濃の山岳信仰
平成7年度	時空の美術と文芸
平成8年度	大昔のけものたち ―信州の哺乳類化石― 豊かな実りを祈る ―小正月の行事― 古代中世人の祈り ―善光寺信仰と北信濃―
平成9年度	エネルギー体験館（巡回展） ―みよう・ふれよう・電気の世界― 極北のイヌイットアート展
平成10年度	信濃国絵図の世界 屋根瓦は変わった
平成11年度	発掘された日本列島 99 黄金と鉄 ―信州の金属鉱山― 風土がはぐくんだ信濃の和紙
平成12年度	村人の祈りと集いの場
平成13年度	長野盆地の10万年
平成14年度	海と大地の物語 ―古日本海と信州の海―
平成15年度	あの世・妖怪 ―信州異界万華鏡
平成16年度	川中島の戦い第1期 ―いくさ・ころえ・祈り 川中島の戦い第2期 ―いくさ・ころえ・祈り よみがえる中国歴代王朝展 ―至宝が語る歴史ロマン 殷から宋まで
平成17年度	信州モノづくり博覧会 ―モノづくりの東西交流―
平成18年度	骨の動物園 昔の道具展 ―冬のくらし―
平成20年度	川中島の戦い史跡めぐり 川中島の戦いと善光寺さん
平成21年度	女たちと善光寺 戦争の記憶 世界天文年2009 天体写真展
平成22年度	お願い！神さま仏さま ―絵馬に見る人々の暮らしと願い― 衣服にみる信濃の歴史 中世奥裾花巨大地すべり
平成23年度	道が人をつなぐ ―北国街道の400年― プレイ・ミュージアム 宇宙のかけら ―隕石からわかる宇宙のふしぎ― 若穂清水寺の至宝 特別公開 よみがえれ！恐竜たち ―大むかしの生命をさぐる―
平成24年度	昭和の道具展 西山地域の文化 学校資料展
平成25年度	山村に生きた武将たち ―東の真田 西の大日方― 考古学のススメ 光のヒミツ ―くらしを支える光― 夏目コレクションにみる全国の土人形 今に残る節供人形たち
平成26年度	おぼけ展 ―新信州七ふしぎ― 生きること・伝えること ―大震災とわたしたち― 発掘された日本列島2014 小正月コレクション ―道祖神とモノツクリの収集― 信仰のみち ―善光寺・戸隠・飯縄・小菅・斑尾・妙高― 狐にまつわる神々
平成27年度	のりもの展 ―進化するのりものの形― ふしぎな松代群発地震 ―発光現象と温泉の湧き出し― 新たな国民のたから ―文化庁購入文化財展― 救い出された地域の記憶 ―神城断層地震から一年― 松代の商家伊勢町八田家 ―近代のくらし―
平成28年度	川中島を行き交った武将たち からくり人形大解剖 川中島の戦いと真田

4 プラネタリウム

当館にはプラネタリウムが設置されています。それまで後町小学校内にあった理科教育センターが博物館に併設され、同時にプラネタリウムも一新され、学校教育と社会教育の両面での利用が計画されました。理科教育センターはそれまでどおり学校教育の中で利用し、博物館は一般向けに投影をすることになりました。

当館に導入されたプラネタリウムはコンピュータ制御で演出が可能な新しいタイプで、プラネタリウムメーカーもプログラムに関してはそれほどノウハウを蓄積していませんでした。昭和56年という、パーソナルコンピュータが普及し始めたころです。記憶装置はフロッピーディスクも一般には普及しておらず、プラネタリウムのプログラム作成用コンピュータはディスプレイモニターはなし、記憶装置は8ビットの鑽孔テープのみです。モニターがないので、タイプライターのようにロール紙に直接印字をしてプログラムを作成していききました。

当初、プラネタリウムメーカーに制作委託した、一作300万円の番組を最低5年間を使用するという方針を上司から聞きました。そんな投影をしていけば来館者減少は必至であり、将来性を危ぶみました。それならと、およそ十分の一の予算で制作できる方法を見つけことができ、自主制作の道を選択したわけです。

それまでこの地域に天文教育を提供できる場はなかったため、プラネタリウムは大きな役割を果たすことになりました。天文学では、実物は手にとることができませんが、夜空には実際のモノが存在しています。プラネタリウムは「実物（本物の空）を多くの人々に親しんでもらうための水先案内人なのです。初代プラネタリウムは平成8年12月1日をもって引退し、二代目が平成9年4月26日から引き継いでいます。（博物館だより第37号）

5 茶臼山自然史館の開館

昭和60年9月23日、篠ノ井岡田の茶臼山公園内に茶臼山自然史館が開館し、分館に

なりました。動物園、植物園、恐竜公園に隣接する立地にあり、また、近くには有名な植物化石の産地が控えていました。地球誕生以来46億年の歴史を身近にわかりやすく展示し、また地元の化石を多数展示することによって長野の大地の生き立ちを学ぶことができる博物館でした。（博物館だより第8号）

後に、茶臼山自然史館は戸隠地質化石博物館へ統合されます。（後述）

6 友の会の発足

平成5年6月1日、以前から博物館内で活動を行っていた「古文書同好会」と「土器作り同好会」が母体となり、博物館友の会が発足しました。（博物館だより第24号）

友の会は自主的な活動に加えて博物館事業の一端を担い、博物館と地域住民とのつながりを深めていくことによって博物館がより活性化することが期待されます。友の会同好会はその後徐々に増えていき、現在は8団体が活動しています。友の会主催の企画展示「私のたからもの展」も6回ほど開催し、近年は、博物館の特別展等にあわせてミュージアムショップを開催しています。友の会は一昨年創設20周年の節目を迎えました。

7 門前商家ちょっ蔵おいらい館の開館

常設展示室2階に「油問屋三河屋庄左衛門商店」の模型を展示しています。長野市東町にあったこの商家は、江戸時代中ごろからの菜種油製造問屋で、戦前までは長野市内で唯一の大規模製造所でした。

都市計画道路整備事業において、建物の一部が道路用地にかかることになり、長野市は、善光寺門前町の代表的な建物の一つとして曳き移転し保存することにしました。曳き移転は平成8年2月から行われ、平成9年3月に完了しました。その後、門前町商家の歴史を伝える場、地域の文化環境の創造の拠点、地域のコミュニケーションの場と位置づけられ、平成13年4月25日、博物館附属施設「門前商家ちょっ蔵おいらい館」として開館しました。（博物館だより第53号）

こうして、当館は3施設を所管することになりました。

8 市町村合併

(平成 17 年の合併)

全国的に「平成の大合併」の波が押し寄せ、長野市も例外ではなく、平成 17 年 1 月 1 日に豊野町、戸隠村、鬼無里村、大岡村との合併が行われました。合併後、戸隠地質化石館と茶臼山自然史館を統合し、新たに戸隠地質化石館の北に隣接する旧柵小学校校舎を改修して、平成 20 年 7 月 26 日に戸隠地質化石博物館を開設しました。(博物館だより第 70 号、71 号、72 号)

その結果、博物館組織は本館とちよっ蔵おいらい館に、戸隠地質化石博物館、鬼無里ふるさと資料館、大岡歴史民俗資料館、豊野資料収蔵室が仲間入りをし合計 7 施設になりました。廃止になった茶臼山自然史館の建物は、平成 25 年茶臼山公園に開設されたモノレールの駅舎として後利用されています。

(平成 22 年の合併)

最初の合併から 5 年後の平成 22 年 1 月 1 日、長野市は信州新町、中条村と合併をしました。それぞれの町村でも博物館施設を所有しており、信州新町美術館、有島生馬記念館、信州新町化石博物館、ミュゼ蔵、中条歴史民俗資料館、日原文化財収蔵庫、信級収蔵庫が加わり、現在は本館のほか、分館が 6 施設、付属施設が 6 施設、合計 13 施設の大所帯になりました。(博物館だより第 75 号)



9 ながはくパートナー

博物館のもう一つの転機になったのはボランティア活動です。平成 21 年の善光寺御開帳にあわせて開催した特別展「女たちと善光寺」において始まったボランティア活動がきっかけとなり、平成 22 年度から活動が本格化しました。

平成 26 年 4 月、博物館のボランティア活動は、地域住民により利用してもらい利用者・来館者が自ら楽しめるものにするとともに、ボランティアの皆さんも主体的に活動していくことを目指し、一歩踏み出した「ながはくパートナー」と名称を変え再出発しました。

現在はパートナー登録数 142 人になっています。学校を中心とした団体対応や体験教室等の実施においてパートナーの活動が力になり、ここ数年入館者数が増加傾向にあります。

10 これから

今年度、当館では館の使命と資料の収集方針の新たな策定を行いました。これによって博物館職員全員のこれから進むべき道が共有され、一丸となって博物館運営をしていかなければなりません。

年数の経過に伴う各施設の老朽化はもちろんです。所管する 13 の施設を今後どのようにしていくのか、35 年が経過した本館のリニューアル計画など、大きな課題をたくさん背負っています。

博物館だよりは 150 号、200 号とこれからも時を刻んでいくことでしょう。博物館活動を自分の館だけで行うには限界があります。これからは博物館が地域にもっと支持される存在になることが必要で、友の会やパートナーの活動を発展させていくことはその大きな原動力の一つになります。各団体や人々とのコミュニケーションを密にし、地域社会とのつながりを広げていくことで、博物館を支える力が強くなっていくと考えます。そして、原点に帰るようですが、常設展・特別展ともにモノ（資料）の力を引き出すのも私たちの重要な役割ではないでしょうか。

(館長 大蔵満)

長野市立博物館所蔵の『富岡日記』を含む六工社関係資料について

1. 『富岡日記』『続富岡日記』（中澤氏寄託）

『富岡日記』は、現在は世界遺産となっている富岡製糸場に、工女として松代（長野市）から出向いた、横田英の回想記として知られている。富岡製糸場の様子が英の体験をもとに具体的に記されているという特徴がある。

この『富岡日記』は、『続富岡日記』とともに、長野市立博物館開館当初から寄託をうけた資料である。すでに述べたように『富岡日記』は主に富岡製糸場の様子を記している。一方、英が松代に戻ってから、長野県初の民間製糸場である六工社を創業するまでを記したのが『続富岡日記』である。

『富岡日記』は、「明治六七年 松代工女 富岡入場中之略記（同四十二年筆記）」と表題がある。また、『続富岡日記』は、「明治七年七月より十二月迄 大日本帝国民間蒸気器械之元祖 六工社創立 第壹年之巻 製糸業之記 明治四十一年一月廿五日記之」とある。英は明治41年に『続富岡日記』を記し、その翌年に『富岡日記』を執筆したことがわかる。

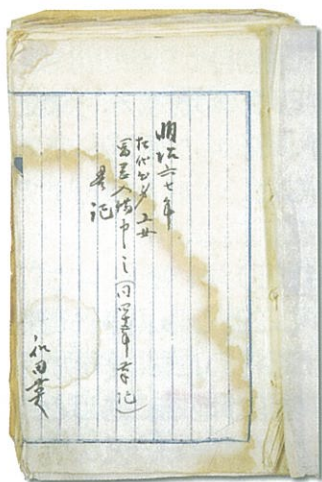
2. 和田（横田）英関連資料（和田氏寄託）

長野市立博物館開館当初からの寄託資料である。この資料群には、富岡日記の草稿と思われるものも含まれる。寄託資料は表1である。

この中には、和田英が松代小学校で講演した記録である、「我が母の躰」が含まれている。明治44年5月7日に書かれたものである。松代小学校に母の写真が飾られたのを機にして、母から教えられた女性としての生き方を講演したものである。箇条書きで記している。

このほか、『富岡日記』、『続富岡日記』の草稿（もしくは下書き）や、（六工社の）寄宿舍の名簿（女性だけのもの）、長野県営製糸場の外観と内部の写真、そして晩年の和田英の写真が寄託されている。

- 写真左 『富岡日記』
- 写真中 我が母の躰
- 写真右 和田英肖像



資料名	筆者	数量	仕様	備考
和田英肖像写真		1	パネル	
寄宿人名簿		1	六工社か	富岡製糸場誌（上）913頁
富岡日記（続稿）	和田英自筆	1	仮綴じ	
六工社創業二年目の春 草稿	和田英自筆	1	仮綴じ	富岡製糸場誌（上）905頁
六工社創業二年目の春 草稿	和田英自筆	1	1枚	富岡製糸場誌（上）906頁
（第二年目開業）	和田英自筆	1	仮綴じ	富岡製糸場誌（上）909頁
我が母の躰	和田英自筆	1		
御雇仏国人フムユナ条約書	横田数馬筆	1		
明治十一年長野県営製糸場写真（外観）		1		
明治十一年長野県営製糸場写真（内部）				

表1 和田家寄託資料

3. 大里忠一郎関連資料（三沢氏寄贈）

平成28年度に大里忠一郎にゆかりの個人の方からご寄贈いただいた。六工社創業に尽力した一人として記されている大里忠一郎（以下、大里と略す）の写真や書簡などである。

大里の経歴については、『真田家家中明細書』（国立史料館編）と、寄贈資料からまとめると表2のようになる。松代藩士としての職歴や、明治維新後についての経歴がわかる。

大里忠一郎の経歴については、ほかに、寄贈資料中の「贈従五位大里忠一郎の事蹟」（資料10）に詳しい。このなかから、大里忠一郎と六工社の関係がわかる部分を抽出する。

廃藩置県を契機として、旧松代藩士には金禄公債が与えられた。大里は、公債が無駄に使われることを恐れ、製糸業の道を開こうとしたのである。言い換えるならば、士族授産の道を製糸業に求めたのである。

明治6年、西条村六工に製糸場の建設を目論んだ。ここでは6人の同志を得て、工場の建設を行い、富岡に派遣された工女を召還して、蒸気機関による五十人繰の製糸場を建設した。ただ、資金繰りに苦勞し、工女の技術が未熟であったので、頗る困窮を極めた。

明治11年には20名の金禄公債をもとにして事業を起こし、20繰釜を増加し、翌12年には、資本金拝借の特典を得て、工場な

弘化2年7月15日	跡式	明細書
弘化2年11月4日	御用部屋小僧役	明細書
嘉永6年4月5日	一番表組御徒士江御番入	明細書
嘉永6年4月9日	御用部屋書役見習小僧役兼	明細書
(嘉永7年)正月24日	非常の節、臨時出張を申し付ける	資料 5-18
(嘉永7年)2月15日	在府1人詰につき御手当て支給	資料 5-22
(嘉永7年)3月16日	横浜応接場警衛を命じられる	資料 5-20
嘉永7年閏7月5日	書役	明細書
安政3年5月14日	御台所目付御買物役兼帯	明細書
安政4年8月12日	沓野御林境立之義懸り	明細書
安政5年11月6日	広土懸り助	明細書
文久2年正月25日	御上下一具被下	明細書
(文久2年)2月29日	碧松院御卒去の節、大儀に付	資料 5-23
(文久2年)12月25日	和宮下向につき、御賄方など勤めにより青銅	資料 5-2
(元治元年)12月24日	大川才兵衛代詰番の出府	資料 5-14
慶応2年正月2日	役料玄一人	明細書
(慶応2年)正月11日	役料玄一人、御杖持	資料 5-15
(慶応2年)2月26日	御上京御供賄方調役・陣場方調役兼帯	資料 5-24
(慶応2年)4月20日	帰城御供	資料 5-13
明治2年9月5日	改名(忠一郎)	明細書
(明治2年)12月29日	戊辰選考の功績により永世高18石5か年	資料 5-4 資料 5-16
明治3年閏10月11日	士族	明細書
明治4年8月19日	松代県庁 免職	明細書 資料 5-9
(明治4年)9月5日	在勤中公私事務多端につき褒章	資料 5-6
明治4年9月15日	松代県庁 戊辰戦争の功績により永世高8石を遣わす	資料 5-10
明治11年2月	長野県会議員補欠選で当選	資料 5-11
明治12年9月29日	第六十三国立銀行支配人並申し付ける	資料 5-7
明治13年1月11日	支配人心得申し付ける	資料 5-8
明治14年6月	西条村戸長を願いにより免じる	資料 5-25
明治23年4月12日	第3回内向勤業博覧会審査官	資料 5-26
明治23年4月15日	内国勤業博覧会第3部勤務を命じる	資料 5-28
明治23年9月30日	審査官の仕事勤勉につき銀牌などを下賜	資料 5-32
明治23年10月21日	第3回内国勤業博覧会審査官を免じる	資料 5-31
明治24年12月15日	臨時博覧会事務局評議員	資料 5-29
明治24年12月21日	臨時博覧会評議員として報償金を下賜	資料 5-27
明治24年12月21日	評議員手当として報償金を下賜	資料 5-30
明治32年11月15日	追賞授与	資料 5-19
不明5月27日	御前様御産御用懸	資料 5-5
不明2月25日	御前様御産御用懸につき金三斤下される	資料 5-21
不明7月8日	臨時御用が多いため青銅百疋	資料 5-17
不明7月8日	御徒士助の勤めに対して清酒	資料 5-1

表2
大里忠一郎
(忠之進) 経歴
『真田家家中明細書』
(明細書と略す)

どを改修し、舶来の蒸気機関を備えて、100人繰の製糸工場とした。

明治15年には、新たに松代町に製糸工場を新築し、共に六工社と称した。松代町の製糸工場の規模は、工男女400人を雇うほどであった。

六工社は共同資本として経営した。大里は初めから米国直輸出を目的としていた。このため、松代製糸の名を海外に知らしめた。

長野町に建設された長野県製糸場については、直接監督する立場にいた。ここでは、50人の座繰を有していた。これを契機として、県下に数十ヶ所の製糸工場を建築させた。

明治22年、農商務省の委嘱によって、埼玉県の木村久蔵、群馬県の田中甚平とともにイタリア、フランスを視察する。この時の写真が残っている。大里はその後、単身渡米し、製糸業の今後を見定めようと、農商務省に復命とともに意見書を提出した。

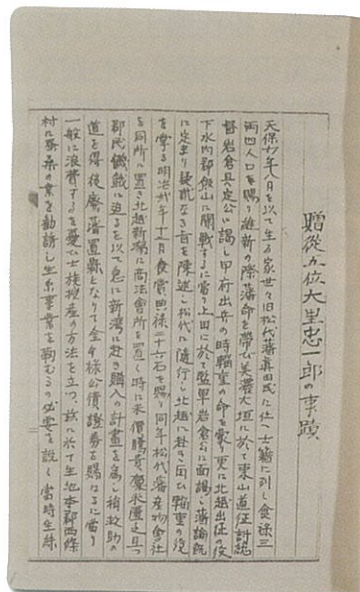
明治26年3月、甥の羽田桂之進にその業務を譲った。事業は発展し、製糸釜800を算するに至った。

明治31年に病死、64才であった。

廃藩置県後、松代藩士の授産の道として、

六工社が設立された。この経緯については、和田英の『富岡日記』『続富岡日記』によって語られてきた。

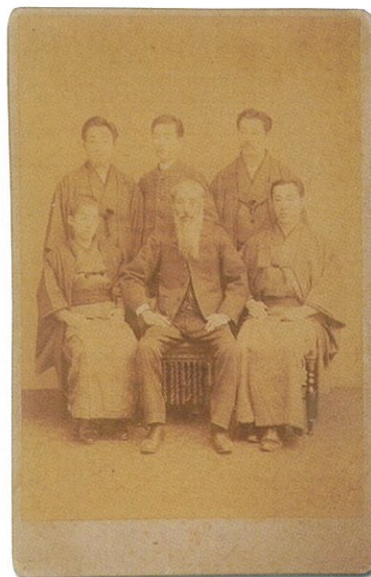
本年度、博物館に寄贈された大里忠一郎関連資料は、英の描かなかった六工社の様子や、明治時代初めの長野県製糸業の様子を示すものとして重要である。
(原田和彦)



大里忠一郎の事蹟



イタリア視察の様子（左から2人目が大里）



大里忠一郎（中央）とその家族

博物館だより 第100号

発行日2016年12月28日

長野市立博物館

〒381-2212 長野市小島町1414

TEL:026(284)9011

<http://www.city.nagano.nagano.jp/museum>

戸隠地質化石博物館

〒381-4104 長野市戸隠栃原3400

TEL:026(252)2228

鬼無里ふるさと資料館

〒381-4301 長野市鬼無里1659

TEL:026(256)3270

信州新町美術館・有島生馬記念館・信州新町化石博物館

〒381-2404 長野市信州新町上条88-3

TEL:026(262)3500

ミュゼ蔵

〒381-2405 長野市信州新町37-1

TEL:026(262)2500